



Title	マイケル・フリードによる絵画の存在論 ーその諸相としての自律・経験・虚構ー
Author(s)	折居, 耕拓
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101577
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （折居 耕 拓）	
論文題名	マイケル・フリードによる絵画の存在論 ーその諸相としての自律・経験・虚構ー
<p>論文内容の要旨</p> <p>本論文の目的は、マイケル・フリード（Michael Fried, 1939-）が著した美術批評と美術史的著作を対象として、批評家や哲学者のテキスト、ならびに芸術作品に対するフリードの解釈を分析することとおして、それらの解釈に通底する諸原理を明らかにするとともに、かかる原理が彼の後続世代の美術と批評に対して有する意義を導き出すことである。</p> <p>マイケル・フリードは、現代のアメリカを代表する美術批評家にして美術史家である。フリードはまずもって、フランク・ステラやアンソニー・カロに代表される、アメリカ抽象表現主義以後の美術を高く評価した批評家である。彼の名は、1960年代中頃に台頭したミニマリズムをその「演劇性」を理由に批判した論考、「芸術と客体性」（1967）をとおして広く知られている。</p> <p>フリードは一般に、彼に先行する批評家クレメント・グリーンバーグ（Clement Greenberg, 1909-1994）に追従した、モダニズムの批評家として理解されている。別の言い方をすれば、フリードはポストモダニズムの理論家たちによって度重なる批判を招いてきた論客である。つまりフリードの美術批評は、少なくとも1990年代にいたるまで、後続の美術批評家や美術史家にとって乗り越えられるべき思想として語られる傾向にあった。しかしながら、ジャック・ランシエール（Jacques Rancière, 1940-）を筆頭とする2000年代以降の美学理論にあって、モダニズム／ポストモダニズムという既存の図式それ自体がすでに問いに付されている。</p> <p>本論文がマイケル・フリードの仕事に注目する動機は、絵画におけるモダニズムの概念を、グリーンバーグやランシエールとは別のしかたで読み直すためである。そのために本論文では、フリードが彼らとは異なる方法で、芸術の「自律」を捉え直しているということに注目したい。</p> <p>より具体的には、本論文が注目するのは、フリードはグリーンバーグが主題として論じなかったものとして、享受者による芸術作品の経験の具体相に焦点を当てたということであり、それに応じて、作品の存立と享受者による経験、それらのあいだの相互的な自律を論じたということである。</p> <p><作品と経験の相互的な自律>という原理を浮かび上がらせるために、本論文ではもうひとつの視点として、フリードにおける「虚構」（fiction）の概念に注目する。ここで虚構とは、芸術作品と享受者のあいだに存する字義通りの関係、つまり現実空間においてそれらのあいだに存するあるがままの関係が、享受者の視点から一時的に中断されるありようを意味する。別の言い方をすれば、フリードにおいて作品と経験の相互的な自律は、あくまでも享受者の主観に対して立ち現れる虚構として——つまり享受者にとって、あたかもそうであるかのような（as if）ものとして——可能となる。かかる意味での虚構を記述することに、フリードの美術批評は賭けられていたのではないか。これらの着想が本論文の独自性をなす。</p> <p>また本論文は、近年の先行研究であるマシュー・アボット編『マイケル・フリードと哲学——モダニズム、意図、演劇性』を踏まえて、フリードの著作におけるモダニズム、意図、演劇性という3つの概念の絡まり合いを解きほぐすことを試みている。だがあらかじめいえば、本論文の目的は、フリードが用いる概念の解明それ自体にはない。本論文の目的は冒頭で述べたように、これらの概念の解明の先にあるものとして、フリードの仕事に通底する諸原理を明らかにすることにある。それら諸原理を構成するのが、上述のような<作品と経験の相互的な自律>である。</p> <p>方針をまとめれば、本論文では、自律・経験・虚構という3つの観点をとおして、フリードによる①1960年代の美術批評、②80年代以降のフランス絵画史研究、③2000年代以降の写真論、これらの3つの段階にわたる仕事を分析する。分析の手法としては概念分析を採用する。つまり、フリードのテキストを対象とした内在的な分析を試みる。その分、それぞれの仕事の背景をなす同時代の文脈への論及や、フリードがあつかう個別の作家や作品に関する分析が占める割合は少ない。こうした手法の選択は、フリードの美術批評に通底する体系的な諸原則を明らかにしようとする本論文の目的にしたがうものである。</p>	

本論文は3部として構成され、6つの章および補論からなる。第1部にて、フリードによる1960年代の美術批評を、第2部にて、80年代以降のフランス絵画史研究を、第3部にて、2000年代以降の写真論を検討の対象とする。

第1章では、1966年から67年にかけて展開された、グリーンバーグによるモダニズムの解釈に対するフリードの批判への検討をとおして、フリードのモダニズム観の独自性について明らかにする。グリーンバーグが個別芸術ジャンルの純粋化を焦点としてモダニズムを捉えたのに対して、フリードは最終的に、瞬時性および現在性の概念の提示をとおして、観者の経験の自律ないし自由を擁護するものとしてモダニズムを捉え直した。

第2章では、ドゥニ・ディドロの演劇論にて提示されたタブローの概念に関するフリードの解釈を分析することをおして、視覚的かつ瞬時的な作品経験、およびこの経験に基づく画中世界と観者の世界の相互的な自律という原理を析出する。かかる理念はフリードにあって、「観者の不在という虚構」を実現しようとする画家たちの企てとして理解される。

第3章では、フリードによるカスパー・ダーヴィト・フリードリヒの絵画とイマヌエル・カントの哲学に関する解釈への検討をとおして、画中世界と観者の世界のあいだの断絶という原理とはことなる、むしろ一方の世界が他方の世界を方向づけるような、両者のあいだにありうるもうひとつの関係をフリードの思想のうちに指摘する。

第4章では、フリードによるエドゥアール・マネの絵画に関する解釈を分析することをおして、絵画におけるモダニズムの条件に関するフリードの着想の独自性を明らかにする。対面性によって特徴づけられるマネの絵画は、観者を不在と現前のあいだのジレンマへと導くことをとおして、最終的にこの観者を、作品から自律した鑑賞主体として確立する。かかる観者の実現こそ、絵画におけるモダニズムの条件をなす。またこうしたフリードによるモダニズムの条件に関する解釈は、本論文第1章にて論じられた、観者の経験の自律ないし自由を擁護するものとしてのモダニズムを、マネの絵画へと遡行するかたちで論じ直したものとして理解することができる。

補論では、ロバート・B・ピピンによるヘーゲル主義哲学の視点からのフリードの美術史観の解釈への検討をとおして、フリードの演劇性概念を、画家と観者、そして画中人物における「意図的な行為の意味」にそくして理解する可能性を示唆する。またこうしたピピンによるフリードの美術史観の解釈について、それが哲学研究と芸術批評とが相互に対話するうえでのひとつの可能な実践であると結論づける。

第5章では、ロラン・バルトの写真論におけるプンクトゥム概念、およびスタンリー・カヴェルの映画論における自動性の概念に関するフリードの解釈を分析し、これらの解釈から、制作者からのイメージの自律という原理を析出し、かかる原理を、前者においては演劇性の克服の試みの限界として、後者においては演劇性からの回避の試みとして特徴づける。

第6章では、ジェフ・ウォールの写真と著述に関するフリードの解釈を検討することをおして、フリードがウォールの写真を特徴づける被視性、および日常性の概念について、画中世界と観者の世界のあいだの自律を、芸術家の視点から意図的に構築するものとして解釈する。ウォールにあってそれらの自律は、＜見られるためにつくられる＞という絵画の存在論的な条件を写真という断片的なイメージをとおして受け入れながら、このイメージを芸術家の視点から表象・物質の両レベルにおいて再構築することによって確立される。

最終的に、次のように結論づける。マイケル・フリードの美術批評と美術史的著作に通底する原理を、いわば絵画の＜存在論＞として定式化することができる。すなわち、絵画と観者、そして画家は、フリードにあって文字通りに隔絶されるべきなのではなく、＜虚構＞として一度切り離されることをとおして、それぞれのアイデンティティを、つまりそれらがみずからに独自のしかたで存在するということを自覚する。別の言い方をすれば、自律という虚構の実現可能性というよりむしろその不可能性においてこそ、絵画と観者は逆説的にも、みずからが事実として現前することへの反省的意識を高める。こうした意味で、フリードは絵画が＜在ること＞それ自体への思索を徹底したといえよう。かくしてこの思索を絵画の存在論と呼び、これをフリードによるモダニズムの解釈の核心をなす原理として本論文は示す。

結論部では最後に、近年のグレアム・ハーマン（Graham Harman, 1968-）によるフリードの美術批評の再評価を踏まえて、本論文の立場を明確化する。本論文はハーマンとはことなり、あくまでもフリードの価値判断を尊重するかたちで、反演劇性の美学を擁護する。本論文が定式化した絵画の存在論としてのフリードの美術批評は、さまざまな種類の芸術が濫立し、なおかつ＜関係＞という標語の下に＜作品＞という個物の単位が徐々に解体していった90年代以降の美術にあって、しかしなお、芸術作品が芸術作品として——単なるスペクタクルとして、ではなく——在るために必要な批評的態度を示すものである。

本論文の本文は95頁、文献・図版・図版出典・あとがきを入れて全110頁、書式は1頁40行で1行40文字、400字詰め原稿用紙に換算して440枚にあたる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (折居 耕拓)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	田中 均
	副 査	大阪大学 教授	高安 啓介
	副 査	大阪大学 教授	池上 裕子
	副 査	大阪大学 准教授	東 志保
	副 査	甲南大学 教授	川田 都樹子
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： マイケル・フリードによる絵画の存在論―その諸相としての自律・経験・虚構―

学位申請者 折居 耕拓

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	田中 均
副査	大阪大学教授	高安 啓介
副査	大阪大学教授	池上 裕子
副査	大阪大学准教授	東 志保
副査	甲南大学教授	川田 都樹子

【論文内容の要旨】

本論文は、マイケル・フリード (Michael Fried, 1939-) の美術批評と美術史学的研究を、「絵画の存在論」として一貫した視座のもとに再構成する研究である。フリードは、1960 年代に同時代美術の批評を行い、その後 18・19 世紀のフランス絵画を中心とする美術史研究へ転じたが、2000 年代には現代写真を取り上げて再び批評活動を展開した。本研究は、こうしたフリードの多面的な活動に通底する主題として、芸術作品と観者との「相互的な自律」をめぐる問いがあると主張する。

本論文第 1 部では、初期フリードの美術批評が分析される。その分析によれば、フリードは、クレメント・グリーンバーグのモダニズム美術論を受け継ぎながらも、絵画の「自律」をジャンルとしての純粋化とは異なる視点で捉えた。フリードはむしろ観者の経験に定位し、作品が観者にもたらす「確信」に注目した。本論文ではこうした前提をふまえて、フリードの論考「芸術と客体性」(1967 年)における、観者の存在に依存するミニマリズム芸術の「演劇性」と、それに対置されるモダニズム芸術の「現在性」および「瞬時性」とが再解釈される。

第 2 部では、フリードの美術史学的研究が検討される。その検討によれば、フリードは、ドゥニ・ディドロの芸術論・感覚論を、「タブロー」の概念を軸に読解しており、この読解の帰結として、フリードは 18 世紀フランス絵画のうちに「反演劇的」な「没入」の美学を見出した。後にフリードは、エドゥアール・マネの絵画の分析を通して、「没入」の美学が 19 世紀には「対面性」のそれへと展開したと主張する。本論文ではさらに、フリードが、ドイツ、とりわけ C・D・フリードリヒの絵画に描かれた「後ろ姿の人物像」を、「没入」とは異なる「認識」という主体の在り方として解釈していることも指摘されている。

第 3 部では、フリードの写真論が考察の対象となる。その考察によれば、フリードは、ロラン・バルトの「ブントゥム」の概念を参照し、写真機構の自動性ゆえに、写真作品内に作者の意図を逃れる要素が含まれることを、反演劇性に寄与するとみなした。他方でフリードは、ジェフ・ウォールが自身の写真作品において、意図的に「没入」を構成しており、これもまた反演劇性の美学を志向するものとみなしている。

以上の議論を通じて、本論文は、フリードが一貫して取り組んできた「絵画の存在論」(ここには写真芸術も含

まれる)を以下のようなものとして描き出している。すなわち、「絵画の存在論」とは、芸術作品の「自律」を、作品自体というよりむしろ観者の経験の在り方を通じて確証しようとする理論である。それによれば、本来は観者の経験から分離しては存立し得ない芸術作品が、あたかも分離可能であるかのように見えるという「虚構」の経験こそ、西洋絵画がその歴史を通じて探究したものであり、フリード自身の批評もその伝統に連なるのである。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、マイケル・フリードの難解な美術批評と美術史研究を明晰に整理し、彼の理論を「絵画の存在論」として体系的に捉え直した点で高く評価される。特に、フリードの理論の核心に、作品（あるいは作品によって表象された世界）と観者との「相互的な自律」への志向があることを指摘して、新たな解釈の枠組みを提示したことは、独創的な試みとして大いに注目に値する。また、現代美術批評との接続を意識し、「現代において反演劇性の美学は可能か？」という問いを立てた点も、単なるフリードの再解釈にとどまらない意義を持っている。

しかし、いくつかの課題も指摘できる。まず、「虚構」や「自律」などの基本的な概念の規定に再考の余地がある。本論文ではこれらの概念が重要な役割を担っているが、その背景の説明や、意味内容の整理という点で十分に意を尽くしていない面が認められる。加えて、フリードがフリードリヒの絵画の解釈の中で提示した「認識者」の概念もさらなる理論的な精査が求められる。

また、現代美術批評との関係についても、さらに掘り下げるべき点が残されている。本論文は、フリードの「反演劇性の美学」を再構成することを重視するあまり、その立場に対する批判的な距離が十分とは言えない面がある。彼の立場が現代の美術の状況に照らしてどこまで有効なのか、より精緻に論じる必要がある。

本論文については、以上のように、「虚構」や「自律」などの概念整理、現代美術批評との関係の掘り下げなどが求められる。しかし、このような課題が指摘されるのも、本論文が独創的な視点から従来の研究を大きく前進させる優れた学術的貢献であり、今後いっそうの展開が期待されるからにほかならない。本論文は、哲学・美術批評・美術史を縦横に横断する学際的アプローチによって、フリードの多岐にわたる著作活動の全体像を、その背景や他の批評家・思想家との関係も含めて解き明かす画期的な研究であり、学位申請者の研究者としての卓越した力量を確証するものである。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。